

## 安全地帯を出でて発言せよ

Voice Your Opinions Outside a Safety Zone

内藤 廣 Naito Hiroshi

建築家・東京大学名誉教授

特集編集担当の青井哲人さんから原稿依頼を受け、内容にとっても興味があったのだが、この重い課題に答えるだけの内容を論考する時間が割けなかったので、郑重にお断りをした。そのかわり感想文を書けということになったので、ひととおり読んだうえで印象を述べたいと思う。

わたしは、安全地帯に自らの身を置いてものを言っている人をあまり信用していない。権威に隠れたり、組織に隠れたり、イデオロギーに隠れたりしている限り、そこにはいかなる説得力もない。ものを言うとき、ものを書くときには、身ひとつで捨て身であるべきだと思っている。自らの言葉に責任を持つとは、そのようなことである。特に3.11以降に生み出された状況は、そのことを建築家諸氏に求めているように思えてならない。

この点において、ここに書かれないくつもの論考には、物怖じしない勇気がある。建築家というフィールドの自己矛盾に切り込んでいるからだ。自らの足元を疑うには度胸が要る。疑った段階で、安全地帯は世界のどこにもなくなるからだ。その意味で、自らを危うくする勇気ある発言が多かった。

## 建築家像の問いの先にある建築文化の醸成

Questions of Architect's Role Toward Advanced Architectural Culture

安森 亮雄 Akio Yasumori

宇都宮大学大学院工学研究科准教授

建築家とは何か。自明なようでいて、日本では明治の近代化以降も社会的・文化的に確立されたわけではなく、現在ますます拡張しつつあるこの職能をテーマにした重要かつ時宜を得た特集である。第1部のインタビューと年譜、第2部の系譜学は、この問いが建築家と社会の関係において繰り返されてきたことを多くの点から指摘しており、現在の建築家の職能の広がりや相対化し、この問いを深化させている。第3部では、縮小し成熟する現代日本社会に適応しながら東日本大震災後に顕在化した現在の建築家像が、進行中の実践とともに、構法、コミュニティ、プランニングといった近接する領域から照射されている。本特集の構成を通時的に見れば、第2部と第3部の間、ちょうど1970年代から1990年代における建築家像の記述が省略されている。簡略化を恐れずに言えば、高度経済成長期の後、国家や技術と

なにせ、戦災復興以来の事態が突然降ってわいたのだ。私見を言えば、あれから半世紀、正しいと思ってやってきたシステムの欺瞞が、わたしたちすべてが見ることを怠ってきた制度の欺瞞が、そして、建築家という立場の脆弱さが、白日の下にさらけ出されたと言ってもよい。完全に安全と言い切れるような場所はどこにもない。これは三陸と福島から学んだことである。うまくいくはずがない。スイスイと事が運ぶはずがない。容易に被災地で信用されるはずがない。建築家は圧倒的な情報不足であり、自らがどのように見られているのかについて余りに無邪気である。

この特集は、自らを映し出す曇った鏡を磨く行為だったのではないか。自分の姿が多少は見えてきたとして、さて、どうするか。建築における「家」は自称するものではなく他称されるもの、という青井さんのため息のような結びの言葉が印象に残った。

特集を読んで、建築という言葉の本質をかみしめ、その核心に切り込んで再構築する時期にきていることを実感した。辰野金吾や伊東忠太まで戻るか、震災復興まで戻るか、戦災復興まで戻るか、語りかけてくるような表紙の言葉が印象的だった。

いった外的な論理が消失するなかで、建築の芸術性や批評性がクローズアップされ、ジャーナリズムと建築批評を媒介にした建築家像の一側面が形成された時代があった。その延長上に、おそらく近年の建築家像の拡張や本特集の問いがあるのだが、こうした近い過去をパースペクティブに検証することも次の課題となるだろう。また、このテーマは、グローバル化の先端で急成長する都市や、建築家像がより安定した社会から見ると、もしかしたら日本特有でドメスティックな議論なのかもしれない。しかし、本特集で検証された多様な建築家像とその社会背景の先には、建築家がそれぞれのフィールドにおける状況や人々とかかわり、その職能を問い続けながら統合力を発揮することにより、現代日本の建築文化が醸成されることを期待させられた。